修士論文最終発表会

ピロティの受容と創造に着眼した 戦後日本住宅史
1950年代日本の住宅作品を研究対象として

住まいの民主化への方向性　1945-50

2024.2.4
中谷礼仁建築史系研究室
後期ル・コルビュジェと
その弟子たちゼミ
5222A001-1 青木理紗子

論文構成

◆目次

0-　序論　序章　研究の背景・目的・方法、ならびに既往の研究
0-1.　第一節　研究の背景と対象
0-2.　第二節　既往の研究
0-3.　第三節　研究の目的と意義
0-4.　第四節　研究の方法と論文の構成

1-　本論　第一章　ピロティの起源と伝播
1-1.　第一節　本章の目的
1-2.　第二節　ピロティの起源
1-3.　第三節　ル・コルビュジエによるピロティ建築作品
1-4.　第四節　日本への伝播
1-5.　第五節　小結

2-　本論　第二章　戦後住宅設計の足跡　1945-60
2-1.　第一節　本章の目的
2-2.　第二節　戦後住宅設計の展開
　〇住まいの民主化への方向性　1945-50
　〇機能主義の実践と伝統との交点　1950-58
　〇住まいの画一化と抵抗／都市へ　1958-60
2-3.　第三節　小結

3-　本論　第三章　対象作品の設計意図と形体の分析
3-1.　第一節　本章の目的
3-2.　第二節　対象作品の設計意図について
3-3.　第三節　対象作品の形体分析について
　〇ピロティ空間の分析
　〇ピロティと住空間の関係分析
　〇住空間の分析
3-4.　第四節　設計意図と形体の分析から見出した傾向
3-5.　第五節　小結

4-　本論　第四章　考察

5-　結論　終章

0. 序章　研究の背景・目的・方法、ならびに既往の研究

0-1. 第一節　研究の背景と対象

◆研究背景

日本では、近代化とそれに伴う西欧化の過程を経ても、家に帰ると履物を脱ぎ、床に腰を下ろすという住まい方を棄てなかった。この文化の土着性は建築の床に現われ、日本住宅史の研究ではその起源を竪穴住居に見るのか、高床住居に求めるのかで解釈が分かれている。これはいずれも、床のあり方が日本における住まいを理解しようとする際に重要な視座を与えるという点では一致していると言えるだろう。

ル・コルビュジエが提唱したピロティは、大地を建築の束縛から解放するという理念を持ち、地面と住まいの新たな関係性を築く提案でもあった。武井誠の研究によれば、ピロティを備えた建築作品の推移を国別に見ると、フランスをはじめとする西欧諸国では、特定の時期に集中して建設された形跡はなく、アメリカでは1970年代後半に作品数のピークを見出せるが、それは特定の建築家によって設計された作品であることが指摘される。ここから日本の独自性として、1950年代から60年代において作品数の顕著な増加傾向が認められ、それは様々な建築家による作品であることが見出せる。

では、戦後日本でピロティが様々な建築家によって採用された理由、近代主義建築の空間を超える意義があるのではないだろうか。

◆研究対象

『新建築』(新建築社、1925年創刊)、『近代建築』(近代建築社、1946年創刊)、『建築文化』(彰国社、1946年創刊)に掲載された15作品を選定した。選定の際には、既往研究における作品のデータベースも参照した。

既往研究と同様に本研究では、人間が容易に回遊できない空間、すなわち現行の建築基準法において床面積に算入されない、高さ1.5m以下の空間を地表付近に有する住宅作品はピロティ形式を採用したものと見なさず、研究対象には含めない。

【表1】1950年代日本において、ピロティ形式を採用した住宅作品

	竣工年	設計者	作品名
1	1953	丹下健三	住居
2	1954	武井正昭	T氏邸
3	1954	篠原一男	久我山の家
4	1954	吉阪隆正	人工の土地に建つ住宅試作
5	1956	吉阪隆正	西宮のU氏邸
6	1957	RIA建築総合研究所大阪分室	芦屋のH.F邸
7	1958	飯塚五郎蔵	軽量鉄骨の高床住宅 - 飯塚邸
8	1958	INA新建築研究所	木造による高床の住宅 - 棚橋邸
9	1958	広瀬鎌二	SH-22　湘南の週末住宅
10	1958	広瀬鎌二	SH-16
11	1958	伴弘好	B氏邸
12	1958	菊竹清訓	スカイハウス
13	1958	田中清	水馬さんの家
14	1959	曽原国蔵	高床のKさんの家
15	1959	増沢洵	ケース・スタディ・ハウス #3

0-2. 第二節　既往の研究

◆ピロティ形式の建築に関する研究

研究対象に着目すると、建築家の作品を対象とした研究と、特定地域の住居形式に着目した研究に大別できる。前者の建築家の作品を対象とした研究は、ピロティ空間のみに着目する傾向があり、ピロティと住空間、両者の関係性を分析したものは見られない。よって本研究では、住要求の視点からピロティ空間を捉えることで新規性を見出す。

①建築家の作品を対象とした研究

〇水野行偉, 峰岸隆 : ル・コルビュジエのピロティの形態論的研究. 日本建築学会近畿支部研究報告集. 1994.
〇四ケ所高志, 塩崎太伸, 奥山信一 : 現代日本の建築家によるピロティ形式の住宅の設計意図. 日本建築学会計画系論文集. 2013.
〇武井誠 : 境界空間としてのピロティに関する研究. 東京大学学位論文. 2019.

1926年から1980年にかけて建築雑誌に掲載されたピロティ作品を対象にピロティ空間の寸法形体を分析し、ピロティ空間の特性把握や設計手法の体系化を試みた。また作品のデータベースを構築した。

②特定地域の住宅を対象とした研究

〇田上健一, 小倉暢之, 福島駿介 : 住要求及び居住実態からみたピロティ型戸建住宅の空間特性. 建築学会計画系論文集. 1999.

沖縄県那覇市を中心としてピロティを備えた戸建住宅を対象に、ピロティ空間の利用実態などを調査した。駐車場の確保と同時に、増築のための空間として想定されていること等が明らかになった。

◆戦後期を対象に含めた、日本住宅史研究

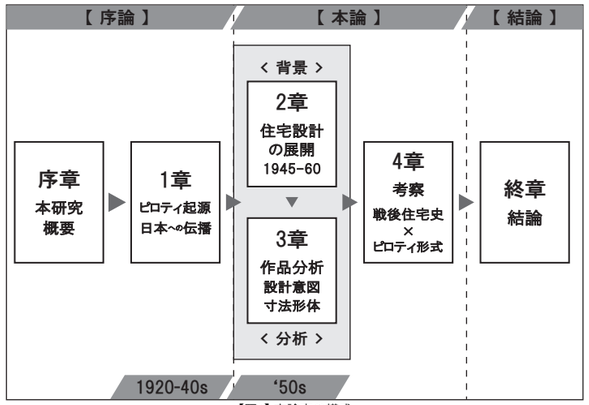
〇宮脇檀 他, 建築文化編集部 編 : 住宅設計 1945-63 建築文化1964年2月号. 彰国社, 1964, 238p.
〇横山正 監修 : 昭和住宅史 新建築1976年11月臨時増刊. 新建築社, 1976, 248p.
〇平井聖 : 日本住宅の歴史. 日本放送出版協会, 1978, 222p.
〇都市住宅編集部 編 : 建築家の自邸. 鹿島出版会, 1982, 160p.

0-3. 第三節　研究の目的と意義

本研究の目的は、建築家がピロティを如何に解釈し、日本の住宅へ取り入れたのかを明らかにすることである。1950年代に竣工した住宅作品を対象に、ピロティ空間と住空間の関係性を分析し、両空間の関係性を解明する。これにより、近代主義建築と日本の住まい方が交差する際に生じた矛盾や整合性を検討し、住まいを地上に持ち上げることが戦後日本においてどのような意義を持ち得たのかを考察する。

0-4. 第四節　研究の方法と論文の構成

本論は三章から構成される。第二章では、戦後15年間の住宅設計の変遷を概観し、ピロティを採用した住宅の位置づけを明確にするための基盤を築く。第三章では、1950年代のピロティ住宅作品を対象に、その設計意図と形体を分析し、ピロティと住空間の関係性を解明する。第四章では、二章・三章の内容を統合した考察を行う。



【図1】本論文の構成

1. 第一章　ピロティの起源と日本への伝播

1-2. 第二節　ピロティの起源

ピロティとは、鉄筋コンクリートや鉄骨などの独立支柱によって建物を地盤面から持ち上げ、地上階を半屋外空間として開放する建築手法である。ル・コルビュジエはこれを「近代建築の5原則」の一つとして提唱し、従来の壁式構造が抱えていた開口や通風の制約を、柱による支持に置き換えることで克服した。この手法により、採光の確保や平面・立面計画の自由度が向上し、地上階を駐車場や歩行空間として活用できるようになった。

著書『プレシジョン(上)』では「採光された床」の重要性が強調され、〈ドミノ・システム〉(1914)において大掛かりな基礎工事を不要としつつ、地面を連続的に残す発想を提示した。≪サヴォア邸≫(1931)では、車の旋回空間を備えたピロティを実践し、単なる構造要素としてだけでなく、建築内に動線や行為を組み込む空間へと展開した。さらに都市計画の視点では、高層住宅の下部を公共空間とし、歩車分離を促すことで住環境の向上を図った。このように、柱による独立支持(構造技術)と地面の解放(空間計画)を組み合わせるピロティの手法は、近代建築や都市計画の革新に大きく寄与したといえる。

1-4. 第四節　日本への伝播

1930年代の日本では、建築にピロティが本格的に導入されることはなく、資材統制や戦時体制の影響もあり、50年代に至るまでその議論もほとんど見られない。こうした状況の中で坂倉準三は、≪パリ万国博覧会日本館≫(1937)において、近代建築理論と日本の伝統建築を結びつける設計を試みた。露出した鉄骨柱でピロティを形成し、その下部に飛び石を配することで内外の連続性を生み出し、日本的意匠との調和を図ったとされる。また、外部にスロープを配して回遊動線を強調する点は、≪サヴォア邸≫に見られる閉じたスロープとは対照的な独自の工夫といえる。

戦後、坂倉はこの設計思想を≪神奈川県立近代美術館≫(1951)へと発展させ、池に面した敷地にピロティを用いることで、自然との対話を意識した観覧体験を実現した。坂倉はピロティを単なる構造技術としてではなく、日本建築が持つ有機的な空間構成を近代建築に取り入れる試みとして展開し、近代と伝統をいかに結びつけるかという問いを探求する手法として用いたと言える。

2. 第二章　戦後住宅設計の足跡　1945-60

2-1. 第一節　本章の目的

本章の目的は、戦後の住宅設計の変遷を概観し、ピロティを採用した住宅の位置づけを明確にするための基盤を築くことである。宮内康の論考を参照し、戦後の建築運動の変遷が建築家の規定する人間像の変化に象徴され、関心と活動が住宅・公共建築・都市へと広がったという指摘に着目する。これを受け本章では、1945年から1960年の15年間を三つの時期に区分し、社会的背景や住宅事情を踏まえながら、住宅設計の展開を記述する。

2-2. 第二節　戦後住宅設計の展開

◆住まいの民主化への方向性　1945-50

1945年から50年にかけて、GHQ占領下での非軍事化と民主化が大きな変化をもたらした。占領軍住宅(DH)の建設などを通じてアメリカニズムが流入し、西山夘三や浜口ミホらが新しい住様式理論を提唱したことで、住まいの民主化を求める機運が高まる。実際の建設は厳しい状況だったが、雑誌社による小住宅設計競技が開催され、合理的な動線計画や家事労働の軽減による新たな住宅像が模索された。こうしたコンペは、理論と実践を結ぶ貴重な場となり、50年以降の小住宅建設ブームにおいて実作として結実する下地を築いた。

◆機能主義の実践と、伝統との交点　1950-58

1950年から58年にかけて、日米安全保障条約が締結され、主権を回復しつつ、「55年体制」による政治的安定や朝鮮戦争特需・神武景気などを背景に、高度経済成長への基盤が固まった。住宅金融公による低利融資や建築士法の整備に伴い、都市部を中心に小住宅の建設が急増し、合理性とローコストを重視する機能主義が支持を集めた。

1951年のサンフランシスコ講和条約締結や映画『羅生門』の国際的評価などを契機に、日本文化への関心が高まり、「新日本調」の隆盛が始まる。それまで封建的と見なされていた伝統的要素を建築空間に取り入れる手法が広まった。一方、欧米の技術工業化を背景に、水回りや設備類を中央に集約するコアシステムが普及し、機能主義と日本の伝統的な住まい方との橋渡しとして注目を集めるようになった。これにより、機能面と伝統を両立させる新たな住宅設計の可能性が広がり、日本独自の建築表現が前進した。

さらに、1954年頃から始まった伝統論争は、近代主義と日本の伝統をどう結びつけるかという大きな転換点となった。50年代後半には、伝統論をより民衆的な次元へ展開しようとする動きも見られ、戦後復興が一段落し社会が高度経済成長へ向かう中で、日本の主体性をいかに再構築するかという課題が、建築を通じて改めて問われることとなった。

◆住まいの画一化と抵抗／都市へ　1958-60

1958年から60年にかけて、経済発展と技術革新により、住宅の大量生産と均質化が進む。1958年の八田利也「小住宅設計ばんざい」では、モダンリビングや大量生産型の住宅が氾濫する状況に警鐘を鳴らした。機能主義理論に基づく合理的なプランニングは住宅の質的向上に寄与したが、一方で住宅の画一化を加速し、建築家の役割を再考させるきっかけとなった。また耐久消費財が普及し、人々の関心は住まいの内部から住環境全体へと広がり、交通や公害、都市計画といった社会問題が顕在化する。この時期、建築家たちは住宅という視点からより広い視野で、都市のあり方を模索し始めた。

2-3. 第三節　小結

1945年から50年は、GHQ占領下の民主化政策や占領軍住宅(DH)の建設を通じてアメリカニズムが流入し、西山夘三・浜口ミホらの新住様式理論が「住まいの民主化」を促進した。雑誌社主催の小住宅設計競技で、後の小住宅ブームを支える基盤が築かれる。1950年から58年は、朝鮮特需や「55年体制」を背景に高度経済成長の土台が固まり、法整備により小住宅の建設と機能主義の実践が進展した。同時にサンフランシスコ講和条約締結や映画『羅生門』の国際的評価を契機に日本文化への注目が高まり、「新日本調」やコアシステムによる伝統と近代の融合が図られる。こうした中、伝統論争で日本の民衆性が問い直され、住宅設計表現が発展した。1958年以降は大量生産・画一化が加速し、「小住宅設計ばんざい」にて建築家の疎外が指摘されるなど、都市への視点が新たな課題となる。

以上より、1950年代の建築家による住宅設計は「機能主義の実践」「伝統の再解釈」「画一化への懐疑」という流れを基底として展開してきたことを示している。

3. 第三章　対象作品の設計意図と形体の分析

3-2. 第二節　対象作品の設計意図について

◆設計意図の傾向について

対象作品の雑誌掲載時に記載された設計情報を6項目（ピロティ採用理由、配置、平面、構造、材料計画、その他）に整理し分析を行った。ピロティ採用理由に着目すると、以下の4要素に分類できる。「住環境の向上」「生活空間の拡張」について言及する作品が多い傾向にあった。

●住環境の向上
- ・湿気対策
- ・日照確保
- ・プライバシーの確保
- ・防犯性の向上

●生活空間の拡張
- ・増築を想定
- ・駐車スペース
- ・眺望確保
- ・庭の活用

●住まいへの理念
- ・住宅不足解消への提案
- ・伝統的な住居形式への志向
- ・浮遊性の実現

●敷地条件の克服
- ・災害対策

3-3. 第三節　対象作品の形体分析について

◆分析手法の設定

①ピロティ空間

ピロティ空間の物理的成立を支える基本構造として「地面」「柱」「天井」の3要素、またピロティと住空間の関係性を考える上で重要な観点として「アプローチ」「空間の演出方法（設い）」「内部空間の有無」の3要素を加え、計6要素に基づいて、以下に示す13の分析項目を設定した。

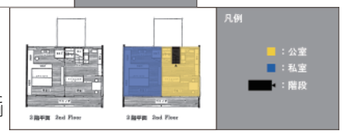
【表2】ピロティ空間の分析方法と分類

	分析要素		分析項目		分類	分類の詳細情報
1	地面	A	地面形状	1	平坦	地面に高低差や傾斜がなく水平に構成されている。
				2	段差	地面に段階的に高低差が設けられている。
		B	仕上げ材	1	土	–
				2	砂利	–
				3	タイル	–
				4	C	–
2	柱	A	立面形状	1	垂直	地面と天井を直線的に結ぶ。
				2	末細	天井から地面に向けて、その表面積が小さくなる。
				3	樹状	地面から天井に向けて、枝分かれする。
		B	建材	1	木	–
				2	S	–
				3	RC	–
				4	S＋C	鉄骨の中にコンクリートを充填している。
				5	RC / 木	地面から天井に向けて、鉄筋コンクリートから木の建材に切り替える。
3	天井	A	梁の露出	1	露出	天井の梁が露出されているか否か。
				2	非露出	–
		B	仕上げ材	1	木	–
				2	S	–
				3	RC	–
4	アプローチ	A	接道の有無	1	接道	利用者が、敷地の面する道路からピロティ空間に直接出入りできる。
				2	非接道	敷地の面する道路からは直接出入りできず、私有地を介して出入りする。
		B	玄関の位置	1	一階	内部空間への玄関・出入口は、何階に設置されているか。
				2	二階	–
		C	通過の有無	1	通過	敷地が面する道路から玄関への動線が、ピロティを通過する計画か否か。
				2	非通過	–
5	設え	A	家具の有無	1	設置	家具が設置されているか否か。設置の場合、その家具は移動可能か否か。
				2	非設置	–
		B	天井高	-	数値	立断面図を基に計測可能な天井高を記載。
6	内部空間	A	内部の有無	1	有	1階部分に、内部空間が設置されているか否か。
				2	無	–
		B	居室の有無	1	有	1階部分に内部空間がある場合、居室が設計されているか否か。
				2	無	–

②ピロティと住空間の関係性

ピロティ空間が住宅内部に果たす役割を検討するため、対象作品の1階平面図を基に分析を行う。ピロティ空間と内部空間の平面形状を抽出し、接道方位、玄関・出入口、階段の位置を明示する。ピロティ空間と内部空間の関係評価を優先するため、壁や柱などの構造体はどちらか一方に属する要素として抽象化し、ノンスケールで図示した。

▲【図2】1階平面図を基にした ピロティと内部空間の関係図例



▶【図3】2,3階平面図を基にした 公室私室の関係図例

③住空間

住宅における平面構成で当時支配的であった「公私定型」を参照し、対象作品の平面計画における公室（居間、リビングルーム）と私室（寝室、子供室）の配置を分析する。視覚的に整理するため各々の室を色分けし、また階段の位置を明示した。

3-4. 第四節　設計意図と形体の分析から見出された傾向

ピロティ空間と内部空間の関係を検討するにあたり、特に「ピロティ部分に内部空間（室）が計画されているかどうか」に着目して対象作品を分類した。その結果、以下のような傾向が見い出せる。

①内部空間がない作品　　：6作品
- ・6作品のうち4作品が、自邸である。
- ・6作品のうち4作品は、増築を想定してピロティを採用している。
- ・6作品のうち5作品は、平面構成にワンルームの採用が見られる。

＝

1. 丹下健三《住居》1953
4. 吉阪隆正《人工の土地に建つ住宅試作》1954
7. 飯塚五郎蔵《軽量鉄骨の高床住宅－飯塚邸》1958
8. INA新建築研究所《木造による高床の住宅－棚橋邸》1958
9. 広瀬鎌二《SH-22　湘南の週末住宅》1958
12. 菊竹清訓《スカイハウス》1958

②内部空間がある作品　　：9作品
- ・9作品のうち2作品が、自邸である。
- ・9作品のうち1作品は、増築を想定してピロティを採用している。
- ・9作品のうち1作品は、平面構成にワンルームの採用が見られる。

＝

2. 武井正昭《T氏邸》1954
3. 篠原一男《久我山の家》1954
5. 吉阪隆正《西宮のU氏邸》1956
6. RIA建築総合研究所大阪分室《芦屋のH.F邸》1957
10. 広瀬鎌二《SH-16》1958
11. 伴弘好《B氏邸》1958
13. 田中清《水馬さんの家》1958
14. 曽原国蔵《Kさんの家》1959
15. 増沢洵《ケース・スタディ・ハウス #3》1959

これらの分類結果から、ピロティ空間に内部空間を設けるかどうかは、建築家の理念と施主の要望のあいだでの譲歩や調整に影響されると推察される。特に自邸の場合はワンルームを志向する作品が多いのに対し、施主がいる作品では、当時一般的だった「公私定型」や「食寝分離型」の平面構成が選択される傾向が見られる。こうした点から、建築家の自邸であることが設計計画に与える特異性を指摘できるだろう。

4. 第四章　考察

◆ <ワンルーム的手法> とピロティ

1950年代から、その後の戦後住宅史にかけて、多くのワンルーム形式の住宅が生み出された。では、こうしたワンルームとはどのような手法だったのか。先行研究では次のように指摘されている。

> 概念としての機能を実体へ還元するための、両者の関係の結びつきを保証する社会的な共同性の不在な日本的近代にあっては、その関係は曖昧化せざるをえず、当初の日本的機能主義の常套手段とした使い良さや経済性といった合理主義も手伝って、機能分節の実体としての間仕切壁を廃止した住居こそワン・ルーム形式の住居なのだ。
>
> 都市住宅編集部 編 : 建築家の自邸. 鹿島出版会, 1982, p.152.より引用

先行研究ではこれを「日本的機能主義の末期症候」と批判的に論じているが、単なる消極的な選択ではなく、積極的に選択された側面があったと考える。なぜなら「近代建築と伝統建築との、内容における対立と形態における類似という矛盾」を包括することのできる手法こそ、ワンルームであると捉えられるからだ。この空間構成により、公室（社会圏）と私室（個人圏）が混淆し、時間変化に伴う住まいの可変性が生まれることで、近代と伝統の交点として新たな住宅像が提示されたといえる。

ここで指摘したいのは「近代建築と伝統建築との、内容における対立と形態における類似という矛盾」を包括する手法を <ワンルーム的手法> とする時、これがピロティ空間に適応された可能性である。柱だけの開放的な空間という伝統建築との形態類似が明確な空間に、必要に応じて家具・調度を配置することで、日常生活または儀式の場を造り出すという、個人圏と社会圏の混淆を生み出したのが、丹下健三であった。

【図5】「磯崎新夫婦、丹下自邸にて」

【図6】「ピロッティより庭を望む」

【図4】戦後住宅設計の展開とピロティ住宅作品の位置づけ

新日本調が興隆する1953年に竣工した丹下自邸において、<ワンルーム的手法> と結合させることで、日本におけるピロティの形式を創造した。故に、ピロティを構えワンルームを採用する住宅は、住まいの可変性を二段構えで担保していたといえる。当時は社会や技術の変化が激しく、2、3年で建築界の方向性が大きく変わるほどの激動の時代だった。そのような状況下で「可能性の空隙」を持ち得る設計は、不安の解消に対して圧倒的な効力をもたらしただろう。

◆住まいの高さと、住まいからの眼差し

その後、ピロティはどのように変化していくのか。これに大きな示唆を与えてくれるのが、住空間から見える景色、つまり視野（眺望）の変化である。丹下健三《住居》や篠原一男《久我山の家》などでは、目の前の庭に向かってのみ開く眺望が特徴的である。これに対し、吉阪隆正《自邸》を契機に、都市を見据えるスタンスが登場する。その発想をさらに発展させたのが菊竹清訓と言えよう。吉阪が住宅不足解消のために「人工土地」概念を提唱し、また菊竹が「ムーブネット」概念を提示したように、こうした「住まいからの眼差し」は、住宅設計において標榜した対象へと向けられていた。ピロティによって得られた高さは、単に眺望を確保するだけではなく、建築家が新たな活動領域を展望し、そこへ踏み込もうとする欲望を象徴していたと考えられる。

【図6】丹下自邸
「南側緑を室内よりみる」

【図7】吉阪自邸
屋上階からの眺望

【図8】菊竹自邸
「居間より外をみる」

> 一文の金もいらない。これで私は地上十数メートルに這い出る。すると私を包む空間の内、上の半分は無限にひろがる。
> 私はここから遠い地平線の彼方まで働く人々の生活を一望に眺め、これら皆が本当に楽しい生活を営めるにするにはどうしたらよいかと考えさせられる。
>
> 吉阪隆正. 吉阪隆正集4 住居の形態. 勁草書房, 1986, p.85 より引用

参考文献／図版出典

主な参考文献・既往研究

◆戦後日本建築史 関連
- ・新建築編集部 編 : 原爆下の戦後10年. 新建築社, 1955.
- ・布野修司 : 戦後建築論ノート. 相模書房, 1981.
- ・中谷礼仁 : 国学・明治・建築家. 波乗社, 1993.
- ・宮内康 著, 刊行委員会 編 : 怨恨のユートピア. れんが書房新社, 2000.
- ・日埜直彦 : 日本近現代建築の歴史. 講談社, 2021.

◆日本住宅史 関連
- ・太田博太郎 : 図説日本住宅史. 彰国社, 1971.
- ・西山夘三 : 日本のすまいⅡ. 勁草書房, 1976.
- ・平井聖 : 日本住宅の歴史. 日本放送出版協会, 1978.
- ・布野修司 編 : 日本の住宅 戦後50年 21世紀へ. 彰国社, 1995.
- ・内田青藏, 大川三雄, 藤谷陽悦 : 図説 近代日本住宅史. 鹿島出版会, 2008.

◆近代建築史, ピロティ 関連
- ・ウィリ・ボジガー, オスカル・ストノロフ 編, 吉阪隆正 訳 : ル・コルビュジエ全作品集. A.D.A EDITA Tokyo, 1979.
- ・ル・コルビュジエ 著, 井田安弘・芝 優子 共訳 : プレシジョン（上）.鹿島出版会, 1984.
- ・岡河貢, 今掛壽大 : 近代建築における風土とデザイン. 日本建築学会中国支部研究報告集. 2004, vol.27, no.9907, p.25-28.
- ・神奈川県立鎌倉美術館 : 建築家坂倉準三 モダニズムを生きる. 建築資料研究社, 2010.
- ・中谷礼仁 : 実況 近代建築史講義. LIXIL出版, 2017.

図版出典

【表1】『新建築』、『近代建築』、『建築文化』の掲載情報を基に筆者作成。
【表2】【図1】筆者作成。
【図2】【図3】『新建築1954年5月号』の掲載情報を基に筆者作成。
【図4】宮脇檀 他, 建築文化編集部 編 : 住宅設計 1945-63 建築文化1964年2月号. 彰国社, 1964.・横山正 監修 : 昭和住宅史 新建築1976年11月臨時増刊. 新建築社, 1976.・都市住宅編集部 編 : 建築家の自邸. 鹿島出版会, 1982.先行研究の掲載情報を基に筆者作成。
【図5】レム コールハース・ハンス ウルリッヒ オブリスト 著, 太田 佳代子・ジェームス ウェストコット 編 : プロジェクト・ジャパン メタボリズムは語る…. 平凡社, 2012.
【図6】丹下健三, 川添登 : 現実と創造 丹下健三. 美術出版社, 1966, p.102より引用
【図7】丹下健三, 川添登 : 現実と創造 丹下健三. 美術出版社, 1966, p.102より引用
【図8】吉阪隆正. 吉阪隆正集4 住居の形態. 勁草書房, 1986, p.85より引用
【図9】近代建築編集部 編 : 近代建築1959年1月号. 近代建築社, 1959. より引用